母のねがい、なかなかとどかず

新潟市内婦人会員のつどい
(1987．5．17)

にいがた県民教育研究所の新潟市内在住婦人会員が五〇名を超える数となった。専業主婦、パート主婦、保育者、看護婦、検査士、教師、学童保育指導員、研究者、医師などなどと多様である。

婦人の方々が、研究所になにを期待して入会してきたのか。子育て、教育のためになにをしなにができるのか考えていきたい。そんなことをざっくばらんに話し交流するのが、このつどいの趣旨であった。

斉藤邦子さんの報告を中心にして、家庭のこと、学校のこと、教師のこと、子どものこと、地域のこと、子育て、教師にとって大切なことが、数多く語り合われ交流された。

ここでは、次の三点にしぼって集会の概要を報告するにとどめる。

(1)母も家庭で「がんばらねば」といつも思うのだが

算数の文章題がよくできないから、理解をよくするために「本を読む」習慣を家庭で、と先生にいわれる。六年生にもなるのに子どもの作文に漢字が見当らない。一日の労働に疲れた身体にむちうって、親は子育てのための勉強をする。そこで得た知識方法で子どもと格闘する。子どもは本を読もうとせず、漢字の練習もちゃんとしない。母はイライラしてくる。

子どもにはチック症状が見え、原因不明の微熱が続く。病院に連れていく。医師が問うことにひとつひとつ、母がこたえる。「お母さんに聞いてるんでない」と叱られる。

親は普通の子でいいと思うのだが普通の子ってどんな子だろう。学校はそれを教えてくれない。

子育て、教育にとって、学校の役割ってなんだろうとつくづく思う、と母親はいう。

(2)子育て、教育で「間に合う」「間に合わない」ってなんできまるのだろう

「野菜屋ですが」「きょうは間に合っています。」ときわめて明確に「いる」「いらない」が言える。しかし、子育て、教育について、なかなかその判断ができない。

親の気持からすれば「のびのびした子」「思いきって遊び、友だちのいる子」「あそびの中で友を知り、冒険心が湧き、元気な子であれば」「やさしくて想像力の豊かな子」と

小さいときから育てるのだが。

参観日に園や学校にいくと、絵を描いてもみな同じようで個性がない。なまえが読め、書ければよい、と言われて学校へ入学したとたん「あんたの家の子は文字力がない」「数概念がない」といわれ、「忘れものが多く、集中力がない」といわれる。

勉強できないと「わたしはバカです」といいなさいと先生にいわれ、さらに一年生のときから先生に体罰を受ける。二年生になると「サンドイッチ」体罰といわれる、自分の頬を自分の両手でパチパチ叩き、友達同士で、「お前のは赤くなっていないぞ」などの体罰相互評価などが強いられる状況も学校にある、という。

一人ひとり、どの子も「問違いのない子」「善い子」にしたい、という思いでのこうした教師の体罰は「教育」ではないのではないか。子どもはまちがいながら、失敗しながら、未熟な自己主張をくりかえしながら、健全な発達を遂げていくのに、それが否定される教育は教育ではないのではないか、父母と教師で克服していかなければと話し合われた。

地域の母親集団づくり運動をとおして、子育て・教育を自信をもってできる母親になろう、と確認し合いながら、母親が真に教師・保護者と手を繋いでいくことの難しさも語られた。

(3)「落ちこぼれ」は自分の家の子がだめだからか

「四五分間、授業について行けないであろうと思われるわが子が、固い椅子に坐ってじっとこらえているのでは…」と働きながら頭をかすめ、胸が痛くなるという悲痛ともいえる発言もあった。

できるのも個性、できないのも個性と臨教審はいい始めた。子どもの学力七・五・三と云われてから久しくなる。小学校に入学してから一年たつごとにみんなと共についていけないのは一割ずつふえて、高校三年になると九割の子がついていけなくなる、ともいわれてきた。県内の「高校中退者」は昭和六〇年度一九〇三名となり史上最高の数となっている。

どの子にも「確かな基礎学力」を「豊かな生きる力」をということは夢にすぎなかったことなのか。「落ちこぼれ」をつくってきたのは「だれか」「なにか」を探し求めていこう、と語り合われた。

多くをいい尽くすことはできなかったが、母親の力で、具体的な子どもの問題から出発して、家庭を地域を学校を広く大きいところからつかみながら、子育て、教育の「母親の教育学」を創造していこう、と決意し合った集会だった。六ケ月後には更にいい話を、と。（木村隆利）